

マネージメント情報 10月 2017年

哺乳の極意は 「口角泡を飛ばさせる」こと



1. 哺乳仔牛の“よだれ”と消化酵素の関係

1) 脾臓からの脂肪分解酵素活性は非常に弱い

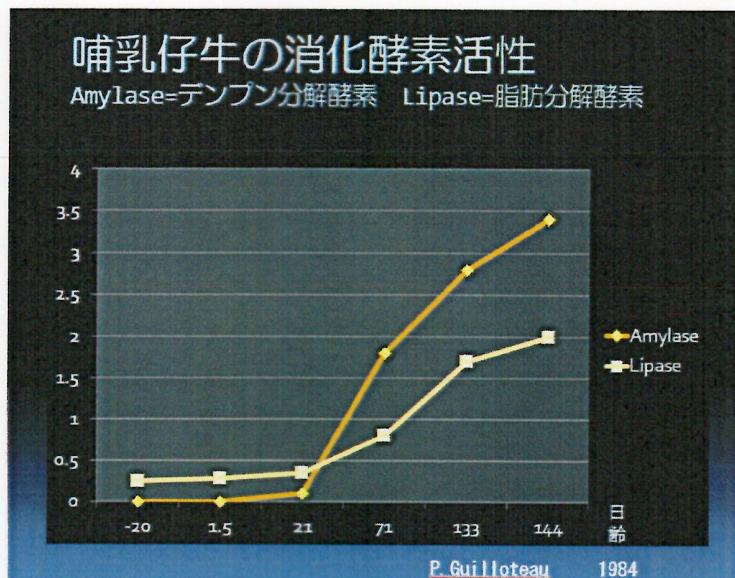


図 1

図 1 は子牛でのんぶん分解酵素（アミラーゼ）と脂肪分解酵素（リパーゼ）の活性を胎児期から生後 100 日以降まで調べたものです。いずれの活性値も 生後 3 週齢ぐらい まではとても低く、その後増加しているのが解ります。特に子牛の最も重要なエネルギー源である脂肪を分解するために脾臓から分泌されるリパーゼ活性はなかなか上昇していません。それでは子牛はどうやって、乳中の脂肪を分解しているのでしょうか？

2. “よだれ”の中の酵素が脂肪分解を助けている

1) “よだれ”の中のプレガストリックエステラーゼ (PGE)

哺乳期の子牛の“よだれ”にはこのリパーゼによる脂肪分解を助ける（促進する）ための酵素（プレガストリックエステラーゼ PGE）がたくさん入っています。この“よだれ”的なかの PGE が消化管に流れ込んで脂肪の分解を促進しエネルギーに変えているのです。

2) パロチン

唾液のなかにはパロチンという成長ホルモンも入っています。この成長ホルモンの一種であるパロチンは、歯や骨の再石灰化促進させ骨を成長させます。また、毛、粘膜、肌の成長と新陳代謝を促します。人ではこのパロチンが美容によいとされています。

す。さらに消化促進作用もあります。ローヤルゼリーが健康と美容によいとされる一つの理由にこのパロチンと似た「類パロチン」がたくさんふくまれているからだそうです。よく噛んで唾液をいっぱい取り入れることが、健康に良いとされる理由にもなっています。子牛が唾液をたくさん飲みこむことが成長につながります。

3. “よだれ”をいっぱい出させる方法

哺乳に時間をかけさせることがポイントになります。ゆっくり自分のペースで飲めるように工夫することです。

1) 哺乳の時間を一定にする

毎日の哺乳時間を一定にすることによって、その時間が迫ると自然と唾液を出し始めます。

2) ニップルで哺乳する

ただのバケツによる哺乳は一気に飲み込んでしまうため“よだれ”ができる時間が短くなってしまいます。ニップルは、バケツより時間がかかるので“よだれ”的量が増えます。この時、ニップルの穴が多くものはダメですよ。しっかり吸い込まなければ出てこないニップルの穴が大事です。状態のよいニップルの穴は、ミルクを入れて逆さにしても、そこから自然にミルクが流れ出てこない状態をいいます。せっかく新しいニップルを手に入れてもこれをわざわざ、ナイフで切ってしまう方がいます。これは古くから「ポケットナイフ症候群」といって、子牛の成長不良や下痢、ルーメンアシドーシス（ルーメンドリンカー）、そして誤嚥性肺炎のもとになることがあります。これは古いニップルをいつまでも使っていることとも共通の問題となります。

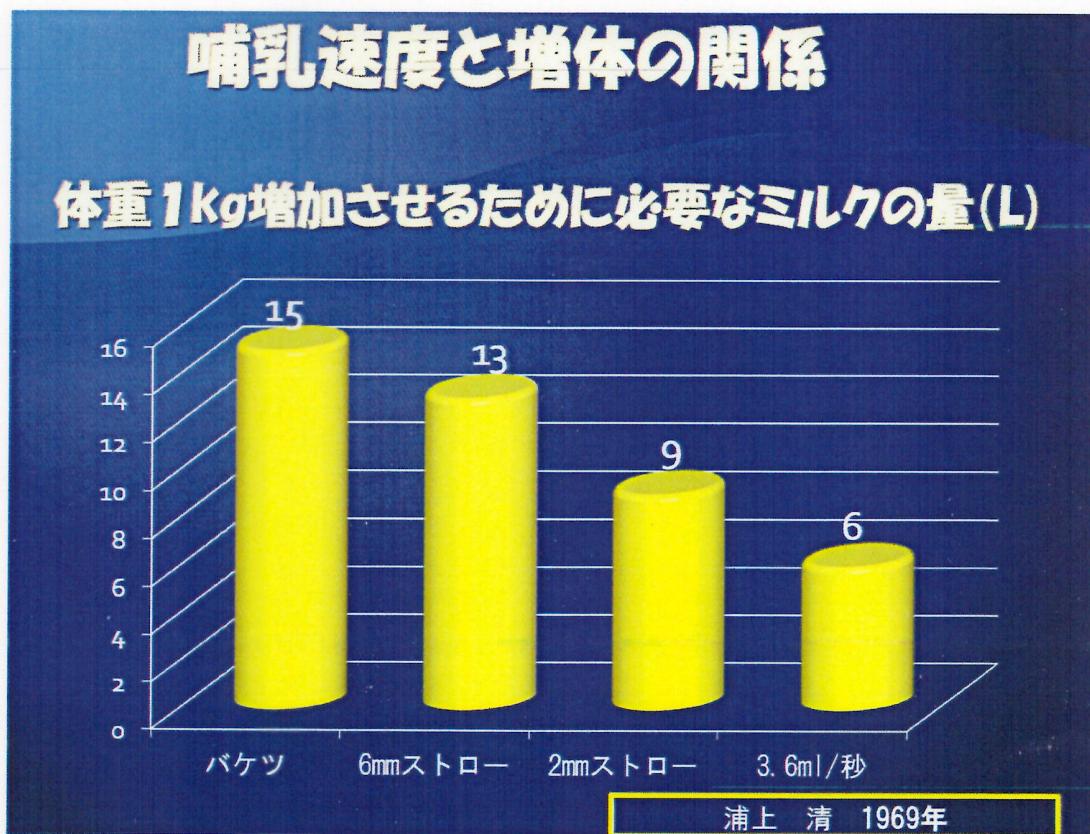
3) 飲み終わってもすぐにニップル哺乳瓶（ニップル付きバケツ）をとりあげない

自然な状態で子牛は、1 Lを数分かけて飲み、それを10回/日くらいするというデーターがあります（Erin Bell）。それからすると、1日45分くらいは乳頭を吸っていたいという欲求があるかもしれないということです。1日2回の哺乳では、せめて哺乳後も気のすむまでニップルを吸わせるとその間に“よだれ”と一緒にでて、ミルクの消化を助けてくれます。

4) ゆっくり飲むと成長がよくなる

図2は、少し古いデーターですが本当に意味深い試験データーです。バケツ哺乳では子牛の体重を1kg増加させるのに15Lのミルクが必要とされたのにたいして、その哺乳速度をわざとゆっくりとさせることによって、体重増加に必要なミルクの量が少

なくなつたのです。これは、子牛が 1kg のミルクから得られるエネルギーをはじめとする様々な栄養を効率よく消化吸収できた証明です。図から毎秒 3.6ml の場合は、バケツ哺乳（ニップルなし）に比べ、半分以下のミルクの量で 1kg 増体を示しているのです。驚くべき数字ですね。本当にすごい差です。同じことをやっていても、ちょっとした工夫で結果に大きな差がでることを示しています。



ゆっくり飲んでたくさんの“よだれ”を飲み込ませ、胃袋での無駄のないカード形成とゆっくりとした消化効率を与える哺乳が大事です。「口角泡を飛ばす」哺乳はそれができている証拠になります。皆さんの農場の子牛は、哺乳時にいっぽい“よだれ”をだしていますか？

黒崎